

東南アジア古典文化論 2009 年度冬季休業課題 「日本のラーマーヤナ」

次の課題に対する解答を A4 判レポート用紙 2 枚以内にまとめて休み明け最初の授業時(2009 年 1 月 14 日)に提出すること

(1 枚めの 1 行めに課題名、2 行めに氏名・学生番号・所属を明記、左上ホチキス止めにすること)

別紙の資料は日本の仏教説話集である『宝物集』(ほうぶつしゅう)に収められた物語の一つであるが、これは日本に伝わる「ラーマーヤナ」の一番古い記録である。『宝物集』は平康頼(たいらのやすより)が 12 世紀末(平安後期—鎌倉前期)に著した仏教説話集である。京都の嵯峨釈迦堂に参拝した康頼が、寺僧と他の参拝者たちの会話を記録したという体裁をとり、その会話の中に日本・中国・インドを舞台とする多数の説話が引かれている。「宝物集」に収められた「ラーマーヤナ」は、寺僧が、仏道を求める十二の道の一つとして「願」を立てることの大切さを説くときに、その例証としてあげているものである。

この資料をよく読んで下記の問いに答えなさい。各解答の初めに問題番号を明記すること。

1. 『宝物集』のラーマ物語は願を立てることの大切さを示す例話としてあげられている。具体的には物語の中のどの部分が例証となっているのかを説明しなさい。
2. 『宝物集』のラーマ物語は、東南アジアに伝わる一般的な「ラーマーヤナ」と比較した場合、仏教に基づく点が大きく異なっている。具体的には物語のどの部分が仏教的な特徴をもっているかを説明しなさい。
3. 文末に「こまかには六波羅蜜経にぞ申しためる」と記されており、「宝物集」のラーマ物語が中国で漢訳された仏教経典を出典としていることがわかる。このことをふまえて、言語の点からみて、日本へのインド古典文化の伝わり方と東南アジアへのインド古典文化の伝わり方にはどのような違いがあるかを説明しなさい。
4. 物語について自由なコメント・感想・質問を述べてください。

宝物集(巻五)より

昔、釈迦如来、天竺の大国の王とむまれておはしまし、時、国静かに、民おなやかにてすぐし給ふ程に、隣国に国あり、舅氏国といふ。彼国飢渴して、五穀種をたち、食物名字をきかず。このゆへに死骸道にみちて、ほとんど、国民餓死におよべり。舅氏国の人民相議して云く、「我等、徒らに死なんよりは、隣国の大国にむかひて、五穀をうばひとりて命をいくべし。戦のならひ、勢による事なし。一日と云とも存命せん事、こひねがふ所也」とて、すでに軍だつを、大国きつて、万が一の勢なるがゆへに、かゝるめ、あざけりて、手どりにせんとするをきつて、大王、大臣、公卿にたまはく、「合戦の時、おほくの人死なむとす。ねがはくは戦をとむべし」と制したまひければ、「言と申ながら、この事こそ、力および侍らね。我、合戦をこのむ事なし。隣国すみおそふ。たゝかはずは存命すべからず」と申侍りければ、大王ひそかに后をよびはなちて、「我、国王としてかせんをこのまば、おほくの人死なむとす。我、深山にこもりて仏法を修行すべし。汝いかゞおもひ給ふ」とかたらし給ひければ、后、「大王をはなちたてまつらずして多年におよべり。今更にいかゞはなれ奉らん」とのたまひければ、「君は女人也。隣国来るといふとも、よもころし奉らじ。よくくはからひ給へ」とこしらへたまひけれども、つゝに大王にくして深山へ籠り給ひぬ。

大国の軍、国王のうせ給へりしことに驚きて、たゝかふ事なくして小国にしたがひぬ。大王深山にして、峰の木の葉をひろひ、沢の若葉をつみて、おこなひたまひけるほどに、一人の梵士出来り、「大王のかくしておこなひ給ふ事、希代の事也。我、御伽つかまつるべし」とつかへ奉る。大王、有難、うれしくおぼしめしてすぐし給ふほどに、大王峰の木の葉をひろひにおはしたるまに、この梵士、后をぬすみてうせぬ。大王かへり、み給ふに、后のおはせざりければ、山ふかくたづね入給ふ。道に大なる鳥あり、二の羽おれてすでに死門にいらぬ。大鳥、大王に申さく、「日来つききたてまつりたりつる梵士、后をぬすみ奉りてにけ侍りつるを、大王かへりたまふまでとおもひて、ふせき侍りつれども、梵士、竜王の形を現して、二の羽をけをりたり」といひて、つゝに死門に入ぬ。

大王あはれとおぼして、高き峰にほりうつみて、竜王にてありけると云事をしりて、南方にむかつておはしましけるほどに、深山の中に、無量百千万の猿あつまりて、のゝしりける所へおはしぬ。猿、大王をみつて、よろこびたのしといはく、「我等年来領する山を、隣国よりうちとらんとするなり。明日午の時に、戦定るべし。大王を以て大王とすべし」といふ。大王おもひかけぬ所へ来りて、くやしき思ひながら、「うけ給ぬ」とてぬたまひたりければ、弓矢を以てきて、大王に奉れり。いふがごとく、つぎの日の午の時ばかりに、池にうき草なびきて、数万の兵をそひきたる。大王、猿のすゝめによりて、弓をひきてかたきむかひ給ふに、弓勢人にすぐれて、背中にまはる。かたき、大王の弓勢をみて、箭をはなたざるまきに、にげぬ。猿等大によろこびて、「このよろこびには、いかなる事をかせんする」といひければ、大王、猿等につげてのたまはく、「我、年頃の后を竜王にぬすみとられたるゆへに、竜宮城にむかひて南方へゆくなり」とのたまひければ、猿等申さく、「われらが存命、ひとへに大王のちから也。いかでかその恩をおもひしらざらん。すみやかにをくり奉るべし」とて、数万の猿、大王にしたがひてゆく。

南海のほとりにあらざりければ、いたづらに日月ををくるほどに、梵天帝釈、大王の、殺生をおもれて国をすて、猿の、恩をしりて南海にむかふ事をあはれとおぼして、小猿に交じて、数万の猿の中にまじはりていふやう、「かくていつとなく竜宮をまもらるといふとも、かなふべきにあらず。猿として板一枚、草一把をまらけて、橋にわたし、筏にくみて、竜宮へわたらん」といひければ、小猿の僉議にまかせて、をのく板一枚、草一把をかまへて、橋にわたし筏にくみて、自然に竜宮城へいたりぬ。竜王いかりをなして、大きな声をおこして、くれをやりて光をはなつほどに、猿等にまひ、雪におそれてたをれふしぬ。小猿、雪山にのぼりて、大薬王樹と云木のえだを折て、かへり来りて、あひふしたる猿どもをなつるに、たちまちにあひさめ、心なけくなりて意をせむ。竜王、光をはなちてひらめきけるを、大王を以て射さす。竜王、大王の矢にあたりて、猿の中におちぬ。小竜等この事を見て、たゝかはすしてにけさりぬ。猿等、竜宮にせめ入て后をとりかへし、七宝をうばひとりて、本の深山にかへり、さて、彼舅氏国の王うせにければ、大国外国臣下等、此大王をしのびて、むかへとりて二ヶ国の王として有。猿丸の、竜宮城をせめてうちとらん事、おぼ(る)けにはかなひがたき願にぞ侍る。こまかには六波羅にぞ申ためる。